様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０９３

研究課題名（和文）障害をもつ高齢者の「学習」支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of programs for promoting learning of old people with physical disabilities

研究代表者
藤原　瑞穂（FUJIWARA, Mizuho）

神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：９０２６９８５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：　障害をもつ高齢者への学習支援プログラムを作成するために，デイサービスでの１年間のアクション・リサーチと高齢者大学受講者への量的調査及び既存データの再分析を行った．量的調査結果より，形成された学習習慣は学習継続への強いニーズとなったこと，学習の継続は発症後の自覚的健康感を高めている可能性が示唆された．アクション・リサーチからは，学習支援には継続型と新規開拓型があり，前者は自己効力感を高めて取り組むこと，後者は新しいことへのチャレンジで，身近な先輩障害者の前向きな姿勢を自分の未来に重ねあわせ，自身のリハビリテーションに意味づけるものであった．両者とも学習成果の地域での展開が重要な要因であった．

研究成果の概要（英文）：　In order to develop programs for promoting learning of old people with physical disabilities, an action research in a day care center for one year, a survey study in a senior college and re-analyses of existing data were conducted. Results of quantitative analysis told us that learning practices formed led to strong needs to continue the learning, and the continuation promoted self-rated feelings of health.
Two types of learning promotion were detected from an action research; namely continued type and newly developed type. The former struggles with disability and improve the self-efficacy of the learners. The latter challenges something new and tries to overlap her/his future with other positive learners and also make sense to her/his rehabilitation. For both types to make use of learning outcomes was an important matter.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：高齢者　障害　学習

１．研究開始当初の背景

人生の完成期である高齢期になんらかの障害をもったとき，その生活を再建していくことは当事者にとっても，またその人を取り巻く社会にとっても重要な課題である．障害をもつ高齢者への支援に関しては，医療や保健，福祉領域からの実践ならびに研究が蓄積されている．一方，この生活再建のプロセスに高齢者の「学習」活動がいかに寄与しているかに関する研究はあまりない．

教育老年学の領域では，高齢者の学習活動への参加の問題はこれまで，多くの場合，エルダーホステルや高齢者大学などを事例として，主に 60 代から 70 代前半の（いわゆる前期高齢期の）比較的活動的な人たちの分析をもとに描かれてきた．またこうした場に参加する高齢者像をもとに，エイジレス・セルフ（シャロン・カウフマン）や老いの泉（ベティ・フリーダン），エイジ・ウェーブ（ケン・ディヒトバルト）といった，高齢期の学習や社会参加活動をささえる理論的根拠が構築されてきた．しかし一方で，例えば 75 歳以上の後期高齢者や障害をもつ高齢者への学習支援のあり方は，あまり取り上げられてこなかった．ピーター・ラスレット（1996）によって提唱された「サードエイジ」概念に基づき，フランスやイギリスなどにおいて実践されている USA の活動も，人生の最盛期／達成・完成期の人々が主な対象であり，その後の「フォースエイジ」は依存・老衰・死の時期であるとして，教育の可能性についてはほとんど触れられてはいない．

本研究の目的は，障害をもつ高齢者の生活再建に学習がいかに寄与しているかを探索し，支援プログラムを作成することである．

２．研究の方法

(1) 障害をもつ高齢者の学習支援プログラムに関する先行研究の分析ならびに国内の先駆的実践を行っている施設約３カ所のフィールド調査

(2) 障害をもつ高齢者の学習支援プログラムを作成するために，支援事例・経験を蓄積・分析

① NPO法人高齢者大学受講者を対象に，現在学習活動を行っている高齢者の学習状況の把握と健康上の問題に関する量的調査の実施ならびに過去に実施された都市型高齢者大学の調査の再分析（要介護認定を受けた受講者と健康な高齢者との比較検討）

② 発症から数年が経過し，介護保険制度によるデイサービスの利用者を対象に，その学習支援事例の蓄積と１年間にわたるアクションリサーチ

３．研究成果

高齢者学習の理論的根拠を探るために「ポジティヴ・エイジング」「高齢者学習の理論」「高齢者学習の内容編成論」「サーバント・リーダーシップ」を中心にレビューを行い，高齢者学習の可能性指摘した．また，障害をもつ高齢者への支援として，リハビリテーションとりわけ作業療法の領域での実践例をレビューした．そのなかで，学習とリハビリテーションの違い，ニーズの十分な把握ならびに作業歴の把握の重要性と学習成果を地域で展開していく重要性が明らかになった．

次に，介護老人保健施設のデイケアならびにデイサービス施設でのフィールド調査から，脳血管発症後，初めてパソコンを習い日記をつけはじめた90歳女性への支援，障害をもった後の生活の再構築のためのニーズの把握を慎重にすすめ支援に生かすことを施設全体で取り組んでいる事例を分析した．介護保険施設では，リハビリテーションや機能維持・回復ならびに生活再建や予防に重点がおかれていた．また「学習」成果を定量的に測定している施設は見られなかった．成果測定や学習評価をいかに行うかが課題として指摘された．

(1)高齢者自身が運営する NPO 法人高齢者大学の量的調査と分析

高齢者大学受講者の学習ニーズと学習経験に関する調査（有効回答 1,491 通）から，カリキュラム・プログラムづくりに関する知見を得た．調査対象の高齢者大学は，高齢者自身が運営する NPO 法人で，行政の枠にとらわれない新しい試みが内包されていた．

① 対象者の健康状態は，「非常によくない」0.9%，「よくない」4.6%，「どちらともいえない」46.4%であり，「よくない」と「非常によくない」をあわせた 5.5%が，健康上の問題を抱えて老人大学を利用していた．

② 学習ニーズでは，歴史関連の希望率が高く，史跡巡り，健康や経済，こころ，旅行に関するニーズも高かった．

③ 過去 10 年間の意識変化では，「新しいことにチャレンジしたい」，「自分のすきなことに時間を使いたい」が高まっていた．

④ 年齢別に学習・社会活動への意識変化をみると，高齢期になるほど，「好きなことや得意なものだけを続ける」傾向が高まっていた．

(2)都市型高齢者大学の調査再分析

過去に実施した都市型高齢者大学の調査をもとに要介護認定をうけた受講者の特徴を再分析し，以下の知見を得た．

① 有効回答 1,241 通のうち，介護保険の認定をうけ「要支援」「要介護」の者は 20 名（1.8%）であった．

② 50%が一人暮らしで，63%は 5 年以上受講を

継続していた. 継続できる要因の一つに制度（何年でも継続可能）とアクセスのしやすさが挙げられた.

③ 高齢者大学でできた友だちの数は, 障害をもたない高齢者よりも有意に多く「20 名以上」13%,「５～10 名」は 37%であった.

④ 障害をもつ高齢者には「これまでやってきた学習を継続したい」という強い希望があり, また「学習することが習慣になっている」と回答し, さらに習慣となっていること自体を評価している者が多かった.

⑤ 受講しているクラスはくらし, 音楽, 絵画などであり, 体力, 書道, 園芸, 体力アップなどを受講したものはいなかった.

⑥ 健康観に関する知見として, 要支援・要介護と認定された者の 50%が「非常に健康」もしくは「どちらかといえば健康」と回答していた. このことから, 高齢大学を受講する/継続することが, 要介護高齢者の自覚的健康感を高めている可能性が示唆された. つまり, やりたいことに参加できるもしくは挑戦しているという事実とその参加への満足感が, 自覚的健康感を高める可能性があるものと推測している.

(3)障害をもつ高齢者への学習支援事例

介護保険制度下でデイサービスを利用している高齢者の支援事例を収集した. 彼らの学習ニーズは, 身体性の維持・回復に重点をおきながらそれを手段的ニーズとして位置づけ, むしろ個人の精神世界の充実や社会的交流を学習目標に位置づけていた. これらのニーズに対し, 高齢者自身が主体に取り組むことができるための仕掛けを支援者がプログラムにちりばめていることが分かった. 同時に, 日々の生活上の困難さを解決していくことも, 学習支援の一部として重要な要素であった.

(4)デイサービスを利用する障害をもつ高齢者への学習支援プログラムの作成：アクションリサーチ

対象者：５名
頻　度：通常のプログラムを実施しながら１週間に１度の頻度で１年間の学習支援を行った.

学習支援は継続型, 新規開拓型の２つに分かれた. 継続型は, これまで行ってきた学習活動を継続したいという希望を支援するもので, 上肢機能や歩行などの障害を乗り越えあるいは工夫をし, 自己効力感を高め, 取り組むものであった.

新規開拓型は, 新しいことにチャレンジしたいという希望を支援するもので, 多くは身近な先輩障害者が生き生きと努力して取り組んでいる姿から, 自分自身の未来の姿を重ねあわせ, その活動を自身のリハビリテーションと位置づけ, 意味づけられたものであった.

プログラムの作成にあたっては, 個別ニーズの把握, 介護保険サービスでの学習支援プログラムの運用, 地域生活における展開という３点が課題となった.

個別のニーズ把握は, 運動機能障害, 失語症, 高次脳機能障害, 合併症の管理などの医学的ニーズが（強く）存在する状況で, ニーズを引き出していくために, 時間をかけて作業歴を語ってもらうことが重要であった.

介護保険サービスには運営上の制約があり, 個々の事例にそったプログラムづくりに制約があった. 一方, 学習の経過や成果を実際の地域生活のなかで実感するための仕掛け作りが必要であり, 人々との交流が積極的に行われることが, 学習への継続的な動機づけとなっていた.

学習支援プログラム

①継続型

60 代男性　脳血管障害による左片麻痺　平地の杖歩行が可能. 麻痺側上肢の感覚は脱失

10 代のころから音楽が好きで, コーラスや民謡, アコーディオンや笛など演奏していた. 退職後の生活にも音楽があった. 脳血管障害受傷語は週３回のデイケアの利用. もう一度アコーディオンを弾きたいと希望するも, 左手で蛇腹を操作することは困難.

プログラム：麻痺側上肢でアコーディオンの蛇腹を操作する練習. 具体的な演奏. 成果を披露する場の設定.

70 代女性　脳血管障害による右片麻痺　下肢装具と杖を使用した歩行可能

長年, 書道を趣味としていた. 発症後も自宅で継続していたが, 信頼のおける仲間からの強い勧めで個展を開催する. 開催に向けての準備を家族と行い, 開催期間中の訪問者への接客と, 開催後のお礼状の発送などの作業を行う.

プログラム：希望することが遂行できるように心身のコンディションを整えるための運動. 歩行機能の維持・改善. 成果の発表の機会の提供.

70 代女性　脳血管障害による右片麻痺　右上肢は生活動作に参加することができない

自宅で夫と二人暮らし. 片手で家事を行っている. おしゃれをして出かけることと, クロスステッチを行う毎日の２時間が生活の楽しみであり, 継続したい作業である.

プログラム：希望することが遂行できるように心身のコンディションを整えるための運動. 歩行機能の維持・改善. 成果の発表の機会の提供.

②新規開拓型

70 代男性　脳血管障害による右片麻痺　杖

歩行と自動車運転が可能
　施設の文化祭で同じ施設に通う人がハーモニカを演奏している姿をみて，自身の呼吸機能の改善ならびに体幹筋の強化になると位置づけ，民間のクラスに通い始める．クラスの進度について行くために，レッスン内容を IC レコーダーに録音し，先生の演奏見本とポイントを自身で作成したエクセルのデータベースに入力して蓄積し，検索のインデックスをパソコンで作成．それをもとに自主練習を行っていた．レッスンについていくために深夜まで取り組み，疲労が蓄積して再発しないか家人を心配させている．
プログラム：運動と休息の作業バランスに関する教育．歩行練習とハーモニカを両手で持つための上肢のトレーニング．デイサービスを利用する仲間へ指導者としての役割と披露の場の提供

60 代男性　脳血管障害による右片麻痺　構音障害と失語症
　ことばが出ないために，会話することをあきらめた生活を送っていた．
プログラム：回想をもちいた会話と傾聴．同じ失語症の男性との交流の機会の提供．

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
1) 堀薫夫：高齢者学習評価におけるサーバント・リーダーシップの問題．日本社会教育学会年報 48：143-154，2012.
2) 藤原瑞穂，堀薫夫：障害をもつ高齢者が高齢者放送大学で学習することの意味．神戸学院総合リハビリテーション研究 8：181-193，2013.
3) 藤原瑞穂，堀薫夫：要介護高齢者と健康な高齢者の高齢者大学受講意識の比較．神戸学院総合リハビリテーション研究 9：21-30，2014.

〔学会発表〕（計３件）
1) 堀薫夫，崔一先：韓国と日本の高齢者教育のガバナンス比較研究：教育行政と福祉行政の対比から．第５回日韓学術交流セミナー，2013，韓国.
2) 堀薫夫：教育老年学と社会教育・高齢者学習：ポジティヴ・エイジングの視点から．日本老年社会科学学会第 55 回大会．2013，大阪.
3) Fujiwara M: Meaning of the Radio Distance Learning of the Elderly with Physical Disabilities, WFOT 2014, Yokohama.

〔図書〕（計２件）
1) 堀薫夫：教育老年学と高齢者学習．学文社，2012.
2) 堀薫夫：大阪教育大学生涯教育計画論研究室編　高齢者大学受講者への学習支援に関する調査研究：NPO 法人大阪府高齢者大学校を事例として．私家版，2014.

６．研究組織
(1)研究代表者
　藤原瑞穂（Mizuho，FUJIWARA）（神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・准教授）
　研究者番号：90269853

(2)研究分担者
　堀　薫夫（Shigeo，HORI）（大阪教育大学・教育学部・教授）
　研究者番号：60173613